

書道を通して子どもにも伝えたいこと

福岡県宗像市立自由ヶ丘中学校

桑山 妙子

はじめに

水無月の雨にうたれた紫陽花が色とりどりのまりのように首をかしげている。自由ヶ丘中に赴任してきて三年間が矢のように過ぎた。この三年間の「書写」の授業の取り組みを振り返り、その足跡をたどってみることにした。

中一ギャップ

毎年、新入生が入ると、気になるのは、まず、「鉛筆の持ち方」だ。年々、その「気になる」ことが単に「気になる」だけではなく「心配になってくる」のは、どういうことであるのか。筆記用具も進化して、次々に使いやすいものが出てきている。持つ所が、様々な材質でできるようになり「長時間書き続いても疲れない」などをキャッチフレーズにしたものもある。ただ、鉛筆の持ち方は、小学校現場でも、一年生の一学期間は文字の習い

始めなので、かなり時間をかけて練習してあるようだ。箸の持ち方と同様、初めて使い方を習った時から、それが、時間をかけて定着してくると思われる。身につけてきたその長年の習慣を変えることは、とても難しい。中一になった生徒たちの鉛筆の持ち方は実に多様化しており、まず、その「持ち方」からアドバイスすることからスタートする。鉛筆が逆方向に倒れたまま、文字を書こうとする者、くいを持つように親指から薬指までで持ち、小指で支えて書こうとする者……過去、このような特異な持ち方をする子どももいた。「持ち方」の次は文字である。平仮名、片仮名、字のバランスはもとより、筆順がまちまちである。筆順をまちがって覚えていたのだろう。もう一度、正しく、確かめて書かせると、「へえ、この字はこういう順番で書くんですか」と、びっくりした表情で書いている。このように筆圧、字のバランスなども、少しずつ、その場その場で例を出すと、「なるほど」と

書道

納得するようである。時間数の関係で、なかなか、ゆっくりとはできないのが現状だが。

自由ヶ丘中では、美術室が二教室あるので、その一つを書道教室として使っている。古いが、奥行きが深く、流し場があつて、気がねなく筆を洗えるところが、何よりもありがたい。生徒は、教室よりも若干幅の広い机に道具を置いて伸び伸びと作品を書くことができる。

赴任した年は、一年生の五クラスの書写を通年で教え、また、二、三年生の選択授業を担当した。教科書と、投げ入れ教材を入れながら作品を仕上げさせたが、とても充実した時間であった。書道のオリエンテーションでは、書道の道具の点検を入れるようにしている。最初の時間に、毛筆で文字を綴った祖先の文化を書道を通して学んでいく大切さを語り、自分のコレクション（少しではあるが

……)を実際に目で見て、手で触れさせる。唐硯、和硯、筆(中国の筆、日本の筆)、文鎮、半紙(中国製、日本製)、手すき半紙などを生徒は目を大きく見開いて、本物の道具にさわって「すごい!」「つるつるしている」「この筆、大きくてやわらかい」など感じたままを言う。少しでも、興味を持ってくれれば、という思いで、道具をもってきているが、その心が生徒に通じる瞬間でもある。

各自の道具についても、点検をしていく。特に筆については、洗い方の大切さを実際に水場で筆を洗いながら説明していく。根元の方に墨が集まりやすく、にかわの成分で固まりやすいため、特に根元はよくすすいでいくように、丁寧に洗うように指導する。硯についても、硯の「海」の部分に墨がこびりついて形が盛り上がっていたりするので、時間がとれる時に、たっぷり水を張った容器に何日かその硯を入れて墨を浮き上がらせて、スポンジ等でこすり取るように指示する。筆は、洗い方が悪いと、墨で固まってカチンカチンになり、水につけておいても元に戻らないものについては、新しく購入するように伝える。このよう「文房四宝」(墨・硯・半紙・筆)については、道具を大切にとり扱うことをイチロー選手を例にあげて力説する。道具をいつも大切にピカピカに磨きあげていたイチ

ロー選手は、やはり、名実ともに一流の選手だと言えると思う。また、それぞれの道具が、どこで、どのようにして作られていくのかという匠たちの技、ものにこめられた思いを本や資料で紹介しながら、日本の伝統工芸のすばらしさを味わわせていくのに努めている。

「進展」の実践

「進展」という文字を書くとき、生徒たちは、まず、「しんしよう」に苦手意識が働く。それで、ワークシートを作成し、番号をうった線をめやすにして、部分的に「進」の「しんよう」と、「展」の「あし」の部分とを書かせてみた。これは、けっこう生徒も書きや

すかったらしく、わりと整った文字を書くことができた。

国際交流

ニュージーランドのマウント・ロスキル校が来校したときは、書道の実技講習会を行った。まず、お手本は、書きやすそうな線の構成からなっている「一」「十」「山」「川」「羊」「力」などを用意し、筆や硯などを準備した。参加した生徒たちは、初めてとは思えないほど、上手に筆を動かして、文字を書いていた。私は緊張したが、大人も子どもも時間いっぱい書道を楽しみ、大満足で自分の作品を持ち帰っていた。このような機会を与えられ、大変感謝している。



くわやま たえこ 宗像市立自由ヶ丘中学校教諭
墨の香り漂う中で、心を落ち着かせ、己と向き合い、筆を動かす時間を生徒に味わわせたい。

